

# 出雲流庭園の不思議「古唐形と濡鷺形石灯籠」

林 秀樹

## 1. 出雲流庭園の不思議

簸川平野に点在する農家の庭のデザインコンセプトは同じである。庭の面積が広い  
か狭いかの違いはあっても、デザインは同じである。枯山水の庭で、石組みや灯籠の  
配置、植えられている樹木の種類も限りなく同じである。これらの庭を出雲流庭園と  
いう。

### \* 第一の不思議

一般的に庭は、床の間に飾られている掛け軸や壺と同じように、美しさや豪華さな  
ど誇示する個性的なものである。ところが出雲流庭園は違う。機能を重視し、デザイ  
ンを同じくする生活食器や民具のように、庭のデザインが同じなのである。

### \* 第二の不思議



出雲市斐川町 豪農屋敷庭園



雲南市三刀屋町 峯寺庭園

この庭園デザインの庭は、商人や武家の屋敷には作庭されていないことである。左の写真は、典型的な出雲流庭園といわれている

「原鹿豪農屋敷庭園」と今年度調査した「峯寺庭園」である。

峯寺庭園は、不昧公ゆかりの雲州流庭園といわれている。しかし、庭園の配置は、真北を向いており、一般的な出雲流庭園が南東から南西に向けて作庭されているのと真逆の方向である。同じく不昧公ゆかりの庭園といわれている「康國寺庭園」は、南西から北西に向けて作庭されている。裏鬼門の方位である南西に巨石や巨木を置く手法もこれらの寺の庭園では見ることはできない。

これまで調査したところでは、社寺庭園はもちろんであるか、商人や武家の屋敷庭園にも典型的な出雲流庭園は見当たらない。私は、

出雲流庭園は、農民の庭ではないかと考えている。

### \* 第三の不思議

出雲流庭園は、主に旧出雲市と斐川町、平田市に展開している。分布域は限られている。雲南市や安来市、大田市には見当たらない。松江市内では、出雲流庭園風にデザインされた庭を散見することはできるが、短冊石や石灯籠の配置など庭の仕様が違うことも多く、クロマツの剪定方法も雲竜型仕立てにこだわらず様々である

## 2. 出雲地方の特徴ある石灯籠

出雲流庭園は、農民のための農家庭園であり、社寺や商人や武家屋敷の庭園とはデザインが違うが、それぞれの庭に据えられている石灯籠には共通性がある。その石灯籠のデザインは、出雲地方の庭園の特徴を表す大事な要素であると考えている。

今回は、出雲地方特有の石灯籠である「古唐形」と「濡鷲形」について、調査したので、紹介する。

### \* 古唐形石灯籠



雲南市三刀屋町峯寺



出雲市国富町康國寺

この灯籠は、1974年(昭和49)に発行された「出雲流庭園—歴史と造形」で出雲地方特有の古銅形灯籠(別名 兜形灯籠)と紹介されている。出雲市斐川町原鹿で郷土史家の江角さんにヒアリングした際には、この灯籠を兜型と説明されていた。昭和初期の来待石灯籠のカタログでは、古唐形と紹介されている。

これまでの庭園調査で確認した

古唐形灯籠は、左の写真の4カ所である。いずれも、それぞれの庭園に一基だけ設置されている。

この形の石灯籠は、現在の来待石灯籠組合のカタログには掲載されていない。何故、出雲特有のデザインといわれた灯籠が使われなくなったのだろうか。

雪見形が主流となっている



奥出雲町大谷 絲原邸(分家)

出雲市斐川町  
原鹿豪農屋敷

石灯籠にも流行があり、現在は春日形と

る。しかし、昭和の初めの「出雲石製品型録」という来待石カタログには、次ページの写真のとおり、古唐形石灯籠と紹介されている。

古唐形というのは、中国の唐代の灯籠を意味する。異名の古銅は、青銅器のことである。

灯笼とは、本来、社寺の照明に用いる釣り灯笼を指すのである。春日大社などでは、右の写真のように、平安時代から多くの人が、釣り灯笼を献灯していた。回廊等の軒に吊し、一斉に蠟燭をともすときは圧巻である。出雲大社などの出雲の社寺では、提灯を吊り下げて、照明としている。

それでは、石灯笼の原点は、どこにあるのだろうか。唐代の石灯笼が中国に残っているというので、調べてみた。

中国では、石灯笼のことは、「石燃燈塔」という。解りやすい命名である。

下の写真は、黒竜江省牡丹江市に残されている石燃燈塔（石灯笼）である。西暦700年頃に中国北東部にできた渤海国の遺跡として保存されている。

火袋は透かし型で、まさに燃燈塔であ



昭和初期出雲石製品型録



奈良興福寺石灯笼



渤海国時代燃燈塔

る。古唐形のデザインと同じである。

日本では、710年に平城京に遷都されている。その頃から、渤海国と日本は、交流が盛んだったといわれており、興福寺などに残る古い石灯笼が我が国の石灯笼の始まりといわれるゆえんである。

### \* 古唐形灯笼のデザインの特徴

この灯笼は、出雲地方固有のデザインだと紹介されていることは先に述べた。

では、どこが固有なのであろうか。宝珠、笠、火袋等の構成は、他の石灯笼と同じである。違うところは一カ所、中台に水をためる仕掛けがあるのである。火袋に近い部分がくりぬいてあり、要所に排水用の穴が開けてある

るのである。排水穴を塞いで、水をため、火袋に蠟燭を灯すと、火が反射して明るくなる仕掛けのように思われる。火を消した後は、水抜きを開いて排水するのである。実際にこのような使い方をしたかは、今となっては謎である。



また、灯明の光を明るく発散するため、火袋のデザインは、透かし形となっている。周囲から蠟燭の火が見えるようにである。軟石である来待石で、このような細い石柱を加工するためには、よほど堅い材質の来待石を使わなければ長持ちしないであろう。

残念ながら、古唐形石灯籠のデザインは、伝統工芸品として認定されていない。カタログに掲載されないのは、当然だろう。近年はこの灯籠の需要がなかったからかもしれないが、火袋の制作が難しいことも原因かもしれない。しかし、右の写真のように火袋のデザインを変更して、細々とは作り続けられている。出雲特有の灯籠としてもっと活用できないものだろうか。



現代の古唐形灯籠

### 3. 出雲流庭園と灯籠と方位

#### \* 出雲流庭園と方位

先に紹介した「出雲流庭園-歴史と造形」では、出雲流庭園の方位について、雨の多い山陰の気候を風土的背景として庭の位置を家屋の南西方向に築庭するのではないかと推測している。そして、例外として、寺院の庭園や神社の宮司宅の庭園などをあげている。併せて、鉄山師の糸原邸庭園なども出雲流庭園の方位を意識しないで作庭していると感想を述べている。疑問が残る解釈である。



石灯籠 (古銅形)



15、千家氏庭園

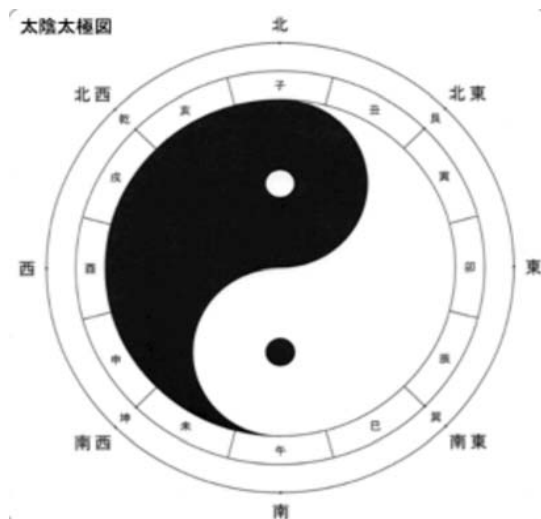
千家邸庭園で項では、「出雲流作庭法の典型的な様式手法を持つが従来の民家庭園と異なって、庭園位置と建築の関係方位は、典型的ではない。それは、北部に山を背景にしているために、勝部氏、江角氏等を代表する民家庭園のように、上部空間

の明るさというものが見られず、一般の寺院庭園的な感覚が感じられる。」と千家邸庭園が東向きの作庭されていることについて述べている。

### \* 巽（たつみ）豊作を祈る方位と灯籠

古唐形灯籠は、民家庭園と宗教庭園ではその配置場所の方位が異なる。出雲流庭園のある民家では、南東方向に大きな灯籠を置くことを基本としている。古唐形灯籠の配置も同じ方位である。

南東は巽、立夏の方位である。陰陽五行では、陰が消え、陽が盛んになる季節である。立夏から立秋までが、農民にとって、農作業で一番大切な時期となり、明るく輝く太陽に豊作を祈る。古唐形灯籠は、一番明るくなる灯籠デザインである。透かし形の火袋から全方向に火が輝き、中台には水が満水となっており、水に反射する光が周囲を明るくする。その光の力で、最後まで残っている陰を明るい火で消したかったのではないか。



### \* 古唐形灯籠と祈り

峯寺と康國寺庭園の古唐形灯籠については、民家庭園のような設置方位の法則は見当たらない。峯寺庭園の灯籠の位置は、本堂から見て真北である。では、何のために古唐形灯籠を置いているのだろうか。



仏教辞典を引くと大日如来の功德に、除闇遍明(闇黒を除いて光明を遍くする)があるという。左の写真は、松江市石橋町 千手院の石灯籠である。中台に水をためる仕掛けはないが、火袋は透かし形となっており、竿には

「除闇」「遍明」と石彫されている。軒下には、9基の釣り灯籠が下げられている。

冬至には、翌日から少しずつ日が延びてくる。一陽来復である。真言宗の峯寺の古唐形灯籠は本堂から真北の方位、臨濟宗の康國寺は、本堂から南西側に設置されている。千手院も真言宗である。灯籠が据えられている方位は様々であるが、大日如来の教えに基づき、除闇遍明の祈りのために本堂前や庭園に古唐形灯籠を置いたと考えると、合点がいく。

#### 4. 濡鷺形灯籠

##### \* 火袋の鷺が文字から図案へ

下の写真は、来待石灯籠組合のカタログの濡鷺形灯籠である。火袋には、鷺の姿が彫り込まれている。春日形灯籠に鹿の姿が彫り込まれていると同様である。これまでの調査では、この灯籠は、神社や寺院では、設置されていない、特別な灯籠だと思っている。



右下の灯籠は、出雲文化伝承館(旧江角邸庭園)にある来待石の濡鷺形灯籠である。六角形の火袋には、「濡」と「鷺」の漢字が彫られている。次のページの写真は、東京都北区にある旧古河庭園の濡鷺形灯籠である。漢字で「濡」「鷺」と文字が彫られている。石材は、来待石と御影石であり異なるが、火袋のデザインには、同じである。どちらも明治末期までに作られたものである。

濡れ鷺形灯籠の火袋の濡鷺の文字から鷺の図案に変わったのは、いつだろうか。

左下は、昭和初期の来待石灯籠カタログの濡鷺形である。



出雲文化伝承館庭園  
濡鷺形灯籠(来待石)

不鮮明ではあるが、鷺の図案が見て取れる。

##### \* 鷺の伝承と灯籠

石灯籠に、彫られている「献灯」「除闇」などの文字は、意味がある。では、濡れた鷺とは、どんな意味であるのか、探してみる。

鷺は、古事記では、國譲りの神話でアマテラスの命に背いて出雲で死んだ天若日子（あめのわかひこ）の葬儀の場に出てくる。「鷺を箒持ちとし」と述べられている。箒持ち（ははきもち）とは、古代葬送の時、箒を持ち葬列に加わり道や墓所を清める役をしたものをいう。

鷺は、七夕にも深いかわりを持つ。七夕の牽牛と

織姫の話は、中国から伝わった伝説である。牽牛は、農耕牛であり、豊作に結びつく。織姫は、養蚕や裁縫の上達のシンボルである。この二人が、年に一回七夕に出会うことができると、豊作と絹や木綿の織物がたくさんできるという。中国では、二人が天の川を渡り出会うための橋をカササギという鳥が、羽を広げて橋を作る。

菅原道真の歌に「彦星の行あいを待つ かささぎの渡せる橋を 我にかさなむ」があり、日本でも古くから鵲橋（かささぎばし）の伝説は広まっていたのではないかと

しかし、カササギは、中国や朝鮮半島に分布する鳥である。日本では生息していなかったが、加藤清正の朝鮮出兵の時、持ち帰った。野生化した分布域は広がらず、現在も佐賀平野だけで見ることができる特殊な鳥である。

伝説では、七夕にカササギは必須であることから、その代わりの鳥として、鷺を選んだといわれている。稲が大きく伸びる夏の田に鷺がすくっと立っている姿から、豊作を祈願する七夕の鳥を鷺としたのかもしれない。先に古事記伝説で述べたように、道を掃いて清める役を持つ鳥である。また、鷺の漢字を解字すると、路の鳥となる。牽牛と織姫の出会いの道となる鵲橋の役割を日本では鷺に託したのであろう。

それでは、何故、灯籠の鷺は濡れたのであろうか。日本では、中国の七夕伝説と異なり、織女に会いに行く牽牛は、船を漕ぎ天の川を渡るという伝説に変化していた。雨が降り、天の川に濁流が流れると、船が出せない。そこに鷺が雨に濡れながら羽を広げて、橋を作ると考えると濡鷺でなければならないのである。

### \* 濡鷺灯籠の配置

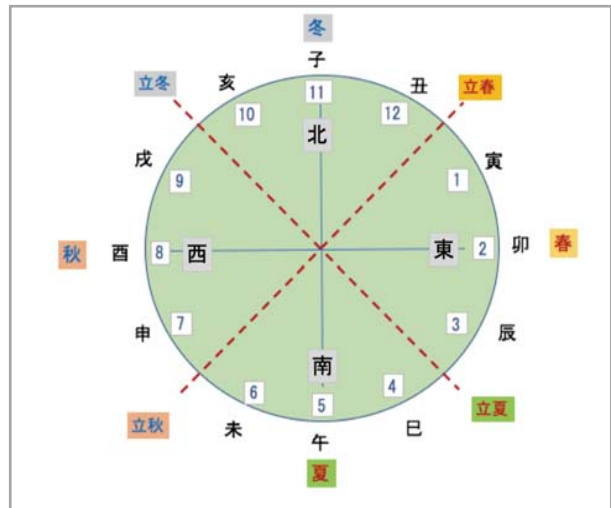
濡鷺型灯籠と七夕との関係については、灯籠の配置を調べると合点が行く。この灯籠は、古唐形灯籠と同じく、庭園内に設置する基数は一基である。配置は、出雲文化伝承館庭園と東京の旧古河庭園で確認した。いずれの灯籠も家の中心(大黒柱、仏



壇) から南西の方向に設置されている。陰陽五行では、右図のように立秋、七夕の方位である。

立春の方位に配置される古唐形灯籠は、陰が一日でも早く開け、日がさんさんと照り作物が大きく成長することを祈った「祈りの灯籠」であると思っている。

立秋の方位に配置される濡鷺形灯籠は、七夕伝説の牽牛と織姫が無事に出あい、作物の豊作と収穫した生糸や綿糸で良い織物



出雲文化伝承館庭園  
濡鷺灯籠



春日形灯籠の鹿



ができることを祈る灯籠ではないかと考えている。

七夕に飾る五色の短冊も陰陽五行に由来するといわれていることから、合点がいくのである。

しかし、近年の濡鷺灯籠は、鷺の姿がデザインされている、「濡鷺」の文字はない。

#### \* 伝統を楽しむ

現在は、石灯籠といえば、春日形と雪見形というほど、この二種類の灯籠が普及している。

濡鷺の伝承が薄れ、春日形灯籠に石彫されている鹿の図案を見た人々は、文字ではなく鳥の図案を入れた濡鷺形灯籠を求めたのではないだろうか。

庶民の歴史や習俗の多くは文書に残っていないように、灯籠のデザインが何故変わったかという経緯を文書にしたものは、見当たらない。

出雲の庭造りには、このような秘密が隠されていると考え、庭の楽しみ方も広がるのではないかと考えている。

以上